

(二) 山川・森戸論争拝見

一

最近『改造』で、山川均、森戸辰男の両君が無駄な論争をしている。実際それは無駄なもの（ある一個もしくは一部人士の気やすめにはなり得ても、大局的の實踐には何等の関連をももち得ないところの）の論争でしかないのだが、ただいかに「政治主義者」とい

うものの正体暴露が、期せずして為されているかという方面から觀察するときには、また一種の興味なきにしもあらずだ。

二

両者の論争は、大衆全民両党の接近を機縁として、巻き起こされているかの如くである。過般、両党合同の報つたわるや堺利彦君いわく「それは大局から見て全合同を妨げるものだ」と。「なぜだ」と詰めよると、「ムニヤムニヤ」なつてしまつたそうだが、これからもあることだ。そんな時には堺のおじさんは「山川君からくわしく聞いてそれから答える」とか「その答えはまだ鎌倉で山川君がこしらへ中だ」とか正直にいつてしまうことだね。「ムニヤムニヤ」なんて見つともないし、第一解放伯爵ではないが「老人の衛生」に毒だよ。いったい堺、山川君達のやりくちを見ると、始めに鼻もちならぬ利己的感情があり、然る後にそれをさも立派かのごとくする技術がある。(もちろん、これはすべての政治主義者がそうだ。政友、民政党どもの、声明書とか、口実などというものが、常にそれであることは、あまりにも明らかな事実だが、無産党もまたそれと少しも違わないということ)を、われわれははつきり知らねばならぬ。では無政府主義者は? とくくものがあれば、無政府主義者は、幹部になるアテもなし権力を握る野心——野心よりは既に全然そんなことの不可能とされている制度的基礎の上に立つものであるから、政治主義者のやりかたのような、いわゆるごまかし政策は、先天的に制限せられているのだと答えるのみである。

三

ひとくちに言つてしまえば、大衆と全民が合同する。そうすると、その他の地方党(水谷君達など)もしぜん併合されていく。取り残されるものは東京無産党、続いて破滅——ということになる。それがための東京無産党(この一派の中にも今や客觀的情勢を論ずる者もあるとかきく。そうすると事だ、いよいよ堺、山川個人の問題に、ことは還元され、洗い出されてくる。個人どもの完全なる没落?)一派の悲鳴の、正当化、技術化という段取りになつたわけなのだ。山川君はいう。一大衆、全民両党の合同が、全無産党合同を妨げるという理由は、両党の合同が指導意識的に近似であるということのために行われるものであるからだ」

つまり山川君は、指導意識などというものは現在の無産党にはない。あるように言いふらしているが、その実、社民党だろうと、極左だろうと変りはない。それらはすべて「労働者、農民、小ブルジョア」等の雑多な「反ブルジョア」的党にしか過ぎないから、その意味で共同戦線党、単一無産党こそ必然でなくてはならぬ。それを必然でなくしているのは、少数個人幹部のことさらな分裂主義的固定化的やりかたのためだから、それには何処までも反対するといふのである。

それに対して森戸君の言い分は、「それは認識の相違によることだ。果して現在の日本の無産階級が、単なる「反ブルジョア」的、共同戦線」的、即ち自然発生的状態のものであるか否かは分らない。否、むしろ、事實は世界的指導精神と密接に関連しており、た

とえ指導精神は世界的の意味では、未だ確立固定し了ってはいないとはいへ、急速にその方向に向つて固定化しつつあるものと言えよう」というのだ。即ち、山川君のいうように、単なる個人幹部が「固定化」する努力をしているのでなく、そうした努力すらも世界的精神との関連において宿命的に為されているものだといふのだ。この点は少くとも、森戸君のいうことを肯づきたい。わが国無産党のみが、世界的の情勢から完全に独立静止することとはあり得べからざること、いわゆる共同戦線の状態、自然発生的反ブルジョアの状態も認めるとしても、さらに急速に分裂しつつある現象も認めねばならぬ。しかも前者は静的、後者は動的で、指導的の分子となるものは、世界的の分裂のそれである。無産党戦線が遂に分裂戦線たることは宿命的の発展過程であらう。

四

山川君の論の弱点は、一、共同戦線の自然発生的単一政党が、わが国にあつて「必然」のものであるとする、だが事實は何故その反対にと発展したか、その説明において「個人の力」とか「偶然の力」とかいう、反唯物論的の力の肯定に帰着しなければならぬこと。二、即時無条件全合同などということ（党大衆さえその気になればという空頼み）を基調とすること。

これは理屈よりも経験が容易に肯づかせない。選挙後、今にも合同するかの如く新聞が騒ぎ、指導者もろばいしたにかかわらず、熱烈に欲求した筈の党大衆は実はその時もケロリとしていたので、騒いだ連中も今は忘れたようになつちまつた。集権制のもとでは、

結局大衆は鈍重で、すべてはピラミッドの頂上における出来ごとでしかない。しかも大衆は政治の悪事に慣れふやけさせられ、幹部がある程度ダラク的であらうとかまわぬ。なぜなら、それをダラクであると暴露する側の方もダラクであるかもしれず、「何が何だかわからない」からである。大衆の動き出す時——それは政治否定の時をほかにしてはない。山川君が「大衆」への空頼みと地団太的の分裂主義幹部暴露によつて、即時全合同を実現しようというのであれば（その他にはやりようがない）その実現は、はなはだ可能性がない。だから山川君の評論の価値が、近頃ずんと落ちたわけ。山川君の評論によつて、実践の基準をきめようというような者は、もはやまず殆んどない。興味は山川君の筆先の喧嘩にあるのみだが、その喧嘩も花々しくないので、読む者もう疲れてしまった。

三、それに山川君は、「現在の反ブルジョア的自然発生的実体も永久にそうであるのではない」とは付け加える。付け加えざるを得ない。そうとすればそれが難物なのだ。無条件全合同などと地団太的にさわぎ、事實は益々それに外れる、というようにしてやつて行く間に、「永遠にそうではない」ところの分裂的の芽生えが、次第に成長して行つて、遂に全合同の夢は、黄場一片の煙のそれとならぬものでもない。

五

一方、森戸君の意見にしても、指導意識の絶対性を説くことまではよいとして彼はいう。「中間合同の指導精神は何か。それは極左主義でも右翼社民主義でもなからう。だからその指導精神のもとに将来極左を、社民を取り入れることにならなくて真の大合同が実行せ

られるだろう」彼が、共產主義社民主義の存在を否定し、新指導精神の世界的出現を予想する立場から、このことをいうのならばいい。

だがそうではないのである。彼は別の所で「世界の無産思想が、共產主義と社民主義の二つである」ことを力説している。

それならば、分裂こそ自然で、「大合同」などの行われることはありうべきことではない。その予想は彼自身の立論を矛盾せしめることだ。「何が何だか分らない！」

六

だが、親切に彼等のいうことを聞いていたのでは到底分りつことはないのだ。一番よく分る方法は、山川君の論は山川君自身の個人的勢力の失墜を恐れるところから起こってきたもの、森戸君はこれも利己的立場からの全民党へのお忠義立て、どちらも政治屋の醜い顔み合いで、矛盾は当り前のことだ。みんな、みんな、ごま化しなんだよ。

(三) 平林初之輔の二元的婦人論

一

友人の話によると、平林君は妻君のほかに、妾をもっているという。その平林君が、このほど「悩める婦人に与う」という文章を書いた。少なからぬ興味も手伝って、わざわざ

五
五

買って読んでみると、何のことだ。思想善導を説く砂利食議員どものような二元論なのである。

二

砂利食と思想善導、妾持ちと婦人指導——それ自身二元論的であることは、いまさら説明するまでもない。が、その説く婦人論もまた、徹頭徹尾二元論的である。

平林君はいうのだ。「現代においては、既に婦人と男子とは、社会的に同じ立場に立っている。見よ、会社の社長の夫人と、職人の妻君との間には、何等の共通点はない」これが彼の婦人論の出発点だ。彼は客観的情勢を指摘したのだ。そうすることによって、「現代」の婦人運動が、「既に」いかにあるべきかを、マルキスト的に弁証せんとした。

三

ところが、折角のその客観的情勢は間違っている。彼は「現代」においてはとか、「既に」とかいうことをいう。だが現代どころか、昔を見よである。將軍家の御内室と、士百姓の女房とは、もつと酷い隔りがあつたではないか。それに比べたら、社長夫人とプロの妻君との隔りの如き、むしろあまりにも共通点があり過ぎるくらいのものだ。昔は着物から違つた。今は外出姿だけでは、どちらが社長夫人か、プロの女房か、一寸わからないまになつた。「現代」では「既に」などという言葉は、全然に意味をなさないのだ。

四

平林君の文章、否、マルキシズムの公式は、ここにおいて破綻する。然るに、何よりも

わるい(？)ことは平林君は平林君がもつある種の聡明さのために、この破綻を、うすうす気づくのだ。そこに平林君の、すべての二元論がうまれる。

芸術論においても、彼は目的芸術が理論的はいかにも立派なようであるにもかかわらず、実際ににおいては予期しない結果をしかかちうるものではないということを気づいている。そしてその反対にある種の感情(怒りあるいは憎み、戦い、憎れ等の感情)が知識を従者とすることによってなす芸術(芸術的芸術)に、人を惹く偉大なものの多いことを知っている。目的芸術は、始めに知識があり、それに感情が付焼刃されてなされる芸術で、理論の立派なのに反して結果は甚だ貧弱なのだ。これらのことに半ば気づいている彼は、彼がアナキストでなく、マルキストに嚙りつくことを必要としている限りにおいて、当然二元論をとらねばならないのである。この点において、(私の見るところでは)少くとも彼は、蔵原某などよりは、遙かに聡明なのだ。聡明のために彼は破綻しているのだ。

五

同じ事は婦人論にもいえる。彼は貧弱なマルキストの婦人運動論を担ぎ出す。現代の婦人運動は「婦人」のみの私事的悩みから社会的の運動へと移ることだ」というのだ。いう意味は、私事的悩みはもち出すなことである(平林夫人の悩みは平林君の妾問題に関するヒステリーであるという)そしてつと高尚な社会的運動に参加しろというのだ。(ところがわれわれはそれらの問題をも洩れなく取り上げることによって、社会運動に参加するのであるが)

すべてこうした態度は、強権者流の胡麻化し的なもので、婦人に「私事」をもち出されては、たまらない所から、その注意をそらさせ、巧みに自己勢力へ利用しようというのである。

現内閣の安達内相も、マルキストと全然に同じことを、婦人達に希望した。(それはいつか書きます)

六

しかし、その不合理なことに、うすうす気づいている平林君は、いわく「それでもどうにもならない個人的の悩みは、親なり、夫なりにいえ」と。親なり夫なりにいつてよくなる悩みであればわけではないのだ。婦人のいわゆる私事的悩みは、社会問題として取り上げ、社会運動の中へ組織することにおいて他には癒やしようがない。だが平林君は人情に頼れという。社会運動と人情運動との二元的婦人運動——おやおや。

(四) 煮え切れぬ善人千葉亀雄

千葉亀雄君が、谷崎事件の批評にちなんで、「恋愛過剰性を清算せよ」というものを書いた。われわれに言わせれば「恋愛過剰性は彼等のもので、われわれのものではない」の

落了

落了

それにしても、恋愛を一生の仕事ではないなどと、わざわざことわらねばならないというのは、何という惨めなことだ。われわれは恋愛をも、相互愛（人類愛）をも、生存欲をも、創造欲をも、すべて人間生活のそれぞれと見ている。そのどれが一生の仕事であつて、一生の仕事ではないなどということはない。所が彼等にはそれがある。千葉君によると、いわく「われわれの一生の仕事は国家社会に奉仕することだ」と。国家社会はよかつたね。

(五) 大山と細迫と、そしてコミンテルンと選挙法改正と

一

『改造』の十月号で、大山郁夫君の「敗北主義者の解消論」と、細迫兼光君の「労農党解消すべし」を読む。かつて、山川均君と森戸辰男君の「分裂主義者の合同論」なる二説に見参した手前、あまり大した獲物ではないのだが、敬意を表することにした。

二

大山君かつて「大衆を欺くもの」に与える文章を発表していわく、「ウルトラどもは、大山、河上に関する、根も葉もないねつ造記事を新聞につける。それらのウルトラの一人と、かつてある席上で出あつて詰じつたら、いわく、階級のためには仕方がないと。彼

等はないことをあると言ひ触らしてまで、つまり大衆を欺いてまで、政治権を獲得しようとする。事ここに至れば、許しがたい」と。

もし、大山君が、果してそうと信じているとすれば、彼は政治家ではないのだろう。政治家とは何か。「大衆を欺く」ことによつて、「大衆を獲得する者」こそ、それであるだろう。「政治家と仲人」ということは当てにならぬという諺でもある。

三

だが、大山君も幸い（？）にして、政治家ではあつた。と見え、その言っていることを見よである。けだし、あまり手腕のある政治家ではないらしく、遂に大衆を欺き得ないのはぜひもない。この点、細迫君とても同じであろう。もつとも、事態頗る窮迫し、両者をして手腕を揮わしめるの余地がなかったためかも知れぬ。即ち、現実段階における実践政治家の反動化への必然的経路における、惨めな一波瀾をここに見るのだ。

四

大山君の「敗北主義者の解消論」は、一、解消運動は線香花火であつた。二、解消派の党規蹂躪、三、解消運動の原因は——大山君はこれを全く不問に付している。故意にそうしたのか、それとも？ 彼はただいう。「彼等の態度豹変の論拠は、遺憾ながら粗雑極まるにわか細工に過ぎない」

つまり、彼等解消派が、解消運動の原因としている、（イ）大衆の要求であるということ、（ロ）社会民主主義であるから、という説——大山君はこれに対して、彼等は合法党

と合法主義党の区別を知らないと酬いている。(ハ)現在の切迫する社会事情に対して無力だからということ——大山君は「では一体現在の左翼陣営内において、ただ労農党だけが無力なのか？」とつめよっている。ほほ以上のようなことを、大山君は「にわか細工の論拠だ」といつているのだ。だが、彼等は何ゆえにわか細工をしてまで運動を起こす必要があつたか？ それについては彼は語らない。

細迫君の「労農党解消すべし」を見ると、一、党制の反民主的であること。二、社会民主党への堕落。三、労農党出現のために、労働組合、農民組合の分裂を生じたこと等々を挙げているが、第三の項については、コミンテルン第五回大会ジノヴィエフの「労働組合の問題に対するレーニン主義の見地では、政治上の分裂はあるとしても、組合を分裂せしめることはない」というのを楯にとつており、なお、「コミンテルンは労農党を潰滅せよと命じている」と言い、これに対する労農党側の「国情を異にする言々」の弁解は、「自分等をコミンテルンと同列に置き得る資格ある」かのように考えているのであり、コミンテルンに対する恐るべき冒瀆だと批難している。

五

これによると、解消派の解消運動の原因は、一、合法党の必然な反動化を見越しての不安と、二、コミンテルンへの忠義だてとにつきていうようで、これに対する大山君等の態度はおつかなびつくりであり、解消、非解消、いずれも政治主義実践の不安と幻滅に立脚していることは、争われない事実である。

七四

時しも、浜口内閣は、突如、選挙法の改正(年令引下げその他)を行おうとしている。このことは、非合法党の全滅、合法党の反動化を誘引するところの、興味ある戦術の一つではないであらうか。

ともあれ、政治戦線必然の堕落は、右せんか、イギリス、ドイツに先例がある。左せんか、コミンテルンなんて、どこの奴等か知らないが、それへの奴隷となつて、いよいよ「実践」から離れてゆくのだね。